

トピックス

## 第7回国際肥満外科学会印象記

栃木県厚生連マロニエメディカルセンター  
下都賀総合病院

川村 功

第7回国際肥満外科学会 The 7th World Congress of the International Federation for the Surgery of Obesity (IFSO) は2002年8月27日～31日までの5日間、ブラジル・サンパウロのWorld Trade Centerで開催されました。

今回は9th ICOと同時に開催という年で、私たちが会場近くのホテルに到着すると思いがけず名古屋大学・佐藤祐造先生御夫婦にばったりとお会いいたしました。IASOの開催される年には、毎年開催のIFSOも同じ時期、同じ場所で開こうという合意はあるようで、前回のパリでのIASO(8th ICO)開催時には同時期IFSOがベルギーのブルージュで開かれました。この時もICOからの特別講演のセッションを設けておりました。パリとブルージュは違う国の都市とはいえ、列車ですぐ近くであることを実感したのを思い出します。

IFSOの学会は毎年9月半ばころが開催時期ですので、今年の開催はいつもより早いわけです。IFSOの開催時期が早まりますと、学会の参加人数に微妙に影響をもたらします。その理由は、国際的な肥満外科の学会が2つあることに関係しています。IFSOともう1つの学会は毎年アメリカ国内で開催される American Society for Bariatric Surgery (ASBS) の年次集会ですが、この開催月は毎年6月であり

ます。アメリカにおける肥満の手術症例数は年々増加の一途で、数年前までは年間2万例といわれていたのですが、現在は7万例にも膨れ上がってしまいました。そのような背景のためにASBSの参加人数も年々多くなり、今年のラスベガスでのASBS学会には1,800名もの参加者がありました。当然のようにアメリカ国外からの出席者もどんどん増えてきておりました。IFSOがASBSに近い時期に開催されると、IFSOの参加人数に影響が出るというわけです。そういう事情もあってか、今年のIFSOは参加者数が約900名と賑やかではありましたが、国外からの参加者は存外少なかったようでした。会長のArthur Garrido Jr.はかなり積極的に国内外科医の参加を促したようで、総参加者数については満足の態でした。しかし、海外からの参加者数については忸怩たる思いがあったものと想像されました。同時に開催されたICO学会の参加人数も前回と比べて少ないということを考えますと、ブラジルという国が遠くて行くのが大変であるという事情が大きく作用していたと思われました。

学会の構成は、ブラジルの厚生大臣 Jose Serra氏による「肥満という難病に如何に取り組むか」の講演を含みいくつかの目玉セッションを織り交ぜて、73題のoral presentation, 126題のposter presentationのほか、video

sessionが14題ありました。このほかに「ISLOSシンポジウム」の演題26題 (ISLOSとはInternational Society for the Laparoscopic Obesity SurgeryのことでIFSOの学会の初日にいつも開かれます)、「Allied Health Session」の10題と発表演題数は例年に比べ少なめでした(ちなみに、昨年、ギリシャ・クレタ島で開催された8th IFSOのoral presentationは154題でした)。

日本からは、小生が31日(土)の午前9:00～10:20のoral sessionのmoderatorを担当し、当院の外科医長・児玉多曜君が31日、12時からのvideo



図 児玉多曜先生「最優秀ビデオ賞」を受賞(第7回国際肥満外科学会, ブラ

sessionで発表をしました。児玉君のvideo発表には、胃バイパス術を鏡視下に行うにあたって胃囊 小腸接合を安全に確実に施行できるように、いくつかの工夫をしているという独創性のあるものであったとの理由で、「最優秀ビデオ賞」が与えられました。肥満手術症例の少ない日本で、地道な検討をしたことが評価(同情?)されたのかもしれませんが。賞品の盾は厚さ2cmもあるガラス製の立派なものでしたが重さも相当なもので、児玉君は日本まで運ぶのに困惑しきりの態でした(図)。

学会期間中、46カ国の代表のうち10数名からなるcouncil meetingが4回開かれました。IFSO, ASBSの両方の学会機関紙になっていて、隔月に発行しているOBESITY SURGERYのインパクトスコアがこの数年3点台と高く維持されており、世界の外科系のジャーナル139誌のなかで25番目の位置にあることが、この会議で今年も話

題に出されました。古い伝統ある雑誌がたくさんあるなかで、発行わずか12年の肥満外科の専門誌が高く評価されるのは、やはり肥満がこの間全世界で急増しており、その対策や治療に各国医師が多く力を注ぐために、この雑誌も多く読まれることが大きく関与しているなどと話されていました。ちなみに、日本外科学会の英文誌であるSURGERY TODAYのランクで100番台ですので、この文をお読みの外科系の先生方には、英文の論文を書かれたときにOBESITY SURGERYへの投稿も考えられてはいかがでしょうか？

毎年のcouncil meetingで学会開催国を決めるのが大きな目的です。開催国はヨーロッパ圏内の国とそれ以外の国が毎年交互にというある程度の約束があります。最も肥満外科が盛んなアメリカでは毎年ASBSが開催されるので、このような取り決めができたのだと思われます。昨年がギリシャでしたので、今年が南米のブラジル、来年が

スペインのサラマンカに決まっています。そこで昨年の会議で2004年の開催国を決めました。その時の候補は、ヨーロッパ圏外のイスラエルと日本でしたが、昨年9月11日の米国テロとそれに引き続く政情不安が手伝って、結局、日本での開催が決まり、小生が学会会長に指名されました。したがって、今年のcouncil meetingでは、2004年の開催日が9月8～11日の4日間であること、場所は東京・新宿の京王プラザであることを含め、小生からの報告をも要請されました。このような次第で、2004年には欧米からを中心に500名ほどの参加者が見込まれるため、日本肥満学会をはじめ諸方面からの、いろいろなご指導・ご鞭撻をいただかなければなりませんので、よろしく願います。

以上、まとまりのない報告ですが、IFSO学会印象記といたします。